

# 會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號五第 卷四十第

行發日一月五年一十正大

## 論叢

マルクスの比例的關係の鐵則 . . . . . 法學博士 河上 肇

租稅立法ける於階級打算的態度 . . . . . 法學博士 神戸 正雄

社會哲學ける於主義的二元論的思想 . . . . . 法學士 恒藤 恭

我が國民所得の地方別研究 . . . . . 法學士 汐見 三郎

## 時論

間接稅の整理を論ず . . . . . 法學博士 小川郷太郎

## 說苑

功利主義と生産政策 . . . . . 經濟學士 堀 經夫

地學觀社會學說に就きて . . . . . 法學博士 財部 靜治

## 雜錄

僧侶と勞働問題 . . . . . 法學博士 財部 靜治

舊岡山藩の井田法 . . . . . 經濟學士 黒正 巖

## 功利主義と生産政策（二）

（功利主義と經濟政策との關係についての學說史的考察の一部）

堀 經 夫

### 緒 言

今日の經濟學——それが個人主義經濟學であると社會主義經濟學であるかを問はず——の根柢に、功利若くは效用 (utility) と云ふ嚮導的觀念が、有意識的に若くは無意識的に抱懷されてゐることは、殆ど疑を容れない事實である。從て古來、財の生産及び分配に對する政策、即ち經濟政策を論ずるものにして、如何にせば世に經濟的效用をより多からしむることが出来るか、といふことを念慮に置かざるは、蓋し罕であらう。これ最大の效用——換言すれば最大の幸福——の獲得を以て吾々の總ての行爲の目的となす所の功利主義哲學と、經濟學若くは經濟政策との間に密接なる關係ありと言はるゝ所以であると共に、又他方、功利主義哲學を否認するものが、今日の經濟學を、それが功利主義的であるとの理由によつて、否定し若くは改造せんと試むる所以である。

余は、人生全般を指導する所の哲學を功利主義に於て見出さうとするものでは決して無いけれども、併し人生に缺くべからざる諸種の有形財の生産及び分配を其の研究の對象となす所の經濟學に對しては、或る意味に於ける功利主義——即ち世に經濟的效用を最多ならしむることを直接の目的となすと云ふ意味に於ける——が其の指導原理となるといふことに就て、余は何等の疑を挾まざるのみならず、これあるが故に經濟學が科學としての地位を保ち得るのであるとさへ信ずる。今其の然る所以を簡單に説明しよう。

それには、先づ功利若くは功利主義の意義を明かにしなければならぬのであるが、今其の詳細なる説明を試むることは、本論文の主たる目的でないから、茲には簡單に功利主義の特徴を擧げるに止めようと思ふ。功利主義とは、之を一言にして示さば、世に快樂を増し苦痛を減ずることによつて、功利を最多ならしめ、以て最大多數人に最大の幸福を齎らすと云ふことを理想となす所の主義の謂である、従つて、第一に、該哲學は極めて實踐的のものであるといふ特徴をもつて居る。惟ふに、人間の幸福即ち人間の必要及び利益といふことが、功利主義の主題である以上、それが實踐的であるといふことは、當然の事柄である。人間の必要及び利益に就て考へんとすれば吾々は勢ひ、人間の生活、活動、並びに有形無形の事物に對する人間の關係、といふような現實なる諸事實に就て思を廻らす必要があるのであつて、唯だ空漠と人間の幸福若くは功利を思索し又は夢みるといふが如きことは、爲し能はない所である。これ、功利主義者が抽象の世界に住まらずして、具象の世界に住むといはるゝ所以である。斯くて、功利主義は、吾々に深い哲理を教へ

ないけれども、吾々の日々の人間的且つ實踐的なる行爲の基準を示して呉れるので、吾々の生活にとつて極めて切實なるものである。而して事實と經驗とは該主義の最も尙ぶ所である。第二に、該哲學は結果本位であるといふ特徴をもつて居る。功利主義は、前述せる如く、最大多數人に最大量の幸福を齎らすことを理想とする。従つてそれを達する手段は、それ自身に價値を有つてはなくて、該目的を達成せる程度に應じて重要さを有つことになる。例へば、自由といひ平等といふことは、それ自體に於て絶對的價値をもつてはなくて、自由は強制よりも、又平等は不平等よりも、より多くの功利を人生に結果するが故に、それ等は尙はるべきである、と功利主義者は考へるのである。これ彼等が結果本位であるを謂はるゝ所以である。第三に、功利主義に謂ふ所の幸福又は功利は、分量的の差異をもつて居るのみであつて、性質的には何等の差等をもたない、といふことを特徴とする。快樂若くは功利には、烈度及び繼續度に於ては、夫々違ひがあつても、それは悉く質的には平等なる快樂に還元し得るものである、と考へられて居る。これ蓋し、若し質的に快樂の差別を認めるならば、最大多數人に最大量の幸福を得せしむるといふことは、全く無意味になつて仕舞うからである。

以上を以て、余は功利主義の特徴を略述し了へたのであるが、是に由て觀れば、該主義が、一個の哲學又は倫理學として極めて缺陷の多いものなることは、一目瞭然である。而かも此の缺陷の多い功利主義は、そが一旦、有形財の生産及び分配を研究の對象となす所の經濟學の範圍に立入ることゝなるに及びては、有形財よりする所の效用又は幸福に關し、そは今日まで常に有力な

る指導者となり來つたのである。而してそれには力強い理由がある。

惟ふに英國の第十八世紀の中葉以後、第十九世紀にかけて行はれたる産業革命は、遽に社會の有形財の激増を促し、従つて此等の有形財即ち富に關する研究を必要とするに至つた。かくて富の生産に關する研究は勿論、其の分配交換及び消費に關するものも續々現はれて來た。而して此等の研究の中心目的となり、當時の最も重要なる實際問題となつたものは、如何にして社會の富を増加し、又如何にして之を最も有利に使用するか、といふこと、言ひ換ふれば、如何にして社會の物質的、幸福の増進を圖るか、といふことであつたのである。これは最も當然の事柄であつて、例へば吾々が遽に富者になつた場合に、如何にして其の富を最大の幸福が得らるゝやうに使用すべきか、といふ現實の問題を考へるのが、人情の自然であると、正に同様である。吾々は爰に、人類の一般的幸福を目的とせる功利主義倫理が、社會の物質的、幸福を研究する所の學問——吾々は之を經濟學又は經濟政策と呼ぶ——の指導原理としての地位を保つに至りしことを、當然の成行であるとして認めざるを得ないのである。かくて功利主義倫理學に於て用ひられてゐた功利 (utility) といふ言葉は、其の儘利用せられて、有形財の使用によつて人が充たす所の欲望の満足の程度を示す言葉——日本語では、之に效用といふ言葉を當てゝ、倫理學で言ふ功利と區別してゐるけれども、(而して有形物より受くる所の快感を效用と云ひ、有形物より受くるものたる無形物より受くるものたることを問はず、一般に倫理學の對象となる所の快感を功利と云ふのは、必ずしも無意味ではなう。) 原語では等しく utility である——となつて仕舞つた。

功利主義と經濟學との結合を歴史的に見れば以上の如くであるが、更に此等兩者の本質に就て考ふれば、其の結合に必然的の關係があることが分る。抑も經濟學で取扱ふ所のものは、人間の生活に用ひらるゝ諸々の有形財である。<sup>1)</sup>古來此等の貨物の數量や種類に就ては、幾多の變遷があつたであらうけれども、少くとも時代を甚しく隔てざる限り、同一の貨物は、略ぼ同量の效用を各人に與ふるものと考へることは、可能であると共に甚しく誤つてゐないであらう。勿論人々の體質又は性情の相違といふことは、多少の影響をもつであらうけれども、例へば、吾々の食する米に就て考ふれば、一年五千萬石の米は、一年七千萬石の米に比して、日本人全體に五分の七だけより、多くの效用を有するものと斷定すると共に、現在の人口に對して數億石の米は其の數に比例せる效用を有するものと考へることは、先づ可能であると見なければならぬ。衣住其他の生活貨物に就ても同様の事が言ひ得らるゝ。然るに例へば學問、道德、藝術といふが如き無形の財に就て觀れば、其の或る物に就ては、今日貨幣を以て假りに其の價値を表示することが出來ないではないけれども、其の效用の程度を數量的に示すことは、不可能であると言はなければならぬ。従つて此等の無形財よりする所の效用の最大分量に就て考へるなどいふことは、全く無意味である。而して經濟學の研究對象となる所のものは、此等の無形財ではなくて、——但し貨幣價値に換算し得らるゝ範圍内に於て、それが經濟學の原則の準用を受けて居ることは、之を認めなければならぬ——前の生活貨物としての有形財である。而して吾々が、吾々の物質的生活を全然否認せざる限り——否認すれば人類は絶滅するの外はない——、有形財よりする效用を世に

1) 人間の生活に用ひらるゝ諸々の有形財の中最も重要なるものは、衣食住の絶對必需品であるが、それ以外に、種々なる慰樂品がある。

最多ならしめやうと圖るのは、洵に自然である。斯くの如く、分量的に測定し得らるゝ所の效用を世に最多ならしむることを、經濟學若くは經濟政策の目的となす時に、實踐的、結果本位的、且つ分量的なる功利主義がそれに結付くのは、自明の理である。

功利主義と經濟學との關係は、以上によつて略ぼ明白であると思ふが、かく考へ來る時に、余は有形財即ち富による效用の獲得を最大ならしめんが爲めに立てらるゝ政策としては、富の生産に關するものと、富の分配に關するものとの二者が、考へ得らるゝと思ふ。前者は富の生産を最大にすることによつて最大の幸福を生まんことを主張し、後者は富の分配を平等にすることによつて最大の幸福を結果せしめんことを主張する。一を生産政策と呼び、他を分配政策と稱ふ。此等兩者は、互に他を輕視する譯ではないけれども、而かも互に兩立し難いものである。(此の然る所以は、後述する所によつて明かになるであらう。) 余は、響きに分配政策による功利主義の實現を主張する學者の説の一例として、キリヤム・トムソンの分配論を紹介したが、本論文に於ては、生産政策による功利主義の實現を主張せし諸學者に就て、學說史的研究を試みようと思ふ。是れは普通自由放任論者又は個人主義經濟學派と呼べるゝ、英國正統派經濟學者の主張である。説述の順序は年代順となし、英國功利主義の創始者の一人たるデイヴィッド・ヒュームより始めて、アダム・スミス、ロバート・マルサスを經て、個人主義的功利主義の大成者たるジュレミ・ベンダムに及び、最後に全體に通ずる特徴を要約する積りである。

2) 本誌第十三卷第二、第三、第四號、

## 第一節 デイヴィド・ヒューム(一七二一——一七七六)

ヒューム以前に、功利學説の淵源をなすと思考さるゝ所の倫理説を説ける學者が、無いのではないけれども、余は、この學説が政治經濟の實際に重要な意義を有するに至りしは、大體に於て第十八世紀の後半即ちヒュームの時代以後であると考ふるが故に、本論文に於ては彼れの倫理説及び經濟政策より出發することとする。

第一、ヒュームの功利主義 ヒュームは、『吾々自身の快樂及び不安の感情はご吾々に眞實であり又は吾々に關係のあるものは無い、』と云ひ、又『それによつて道德的善又は惡が判斷さるゝ所の特殊なる印象は、特定の苦痛又は快樂に外ならない』と云つて、苦痛又は快樂の感情が吾々人類にとつて最も切實であると共に、道德上の善惡を判斷する基準となることを、先づ明かになしてゐる。而して如何なるものが吾々の快樂を増し苦痛を減するかを吾々の理性によつて判斷する場合に、之を功利と名付けるならば、倫理學の中心問題は則ち功利といふことに在る譯である。ヒュームは、宗教的禮拜の起源は、日とか月とかいふ如き無生物が人類の幸福と人類の維持とに對して功利を有して居る所から、人が其等の物に對して尊崇の念を懷けることに發して居るとの説を是認し、而して古の英雄や立法者が神として祭られて居るのも、矢張り同様の理由によると主張したる後に、次の如く言つてゐる。

『道德性の總ての決定に在つては(即ち、或る行爲が道德性を帯ぶるや否やを決定する場合には總て、の意——譯者註)、

公衆の功利(Public utility)をいふの事情が、常に重要視されて居る、而して或は哲學に於て或は日常生活に於て、義務の

- 3) 例へば、Richard Cumberland. の如し、
- 4) David Hume, Treatise of Human Nature, Book III. (1740), Of Morals, sec. I.
- 5) Ibid. sec. II.

範圍に關し論争が起る場合には何時でも、この問題は、あらゆる方面に於ける人類の眞實なる利益(如何)を確かむること以外  
の如何なる方法を以てしても、決してより正確に決定され得ない。……………<sup>6)</sup>  
又曰く、

『……………總ての事務に就て、功利の事情が賞讃及び稱揚の源であること、行爲の功過に關する總ての道德的決定に於て、それが  
(功利が)常に據處となるといふこと、正義、忠誠、名譽、忠順及び貞潔に對して拂はるゝ高き尊敬の唯一の源は、それ(功利)で  
あるといふこと、其他の總ての社會的徳性……………より、それは(功利は)離すことが出来ないといふこと、即ち一言にすれば、それ  
(功利)は人類及び吾々の仲間同志に關連せる道德の主なる部分の根抵であるといふことは、實際の事實である』<sup>6)</sup>

斯くて、功利は倫理學上に重要な地位を占むるに至つたのであるが、この功利こそは、人類を  
幸福に導く所のものに過ぎないが故に、畢竟、幸福といふことが、人類の目的であり倫理學の理想  
であるといふことにならなければならない。

然らば、ヒュームは爰に所謂幸福に就て如何なる見解を有つてゐたかといふに、彼は、所謂精  
神的幸福と物質的幸福とに關しては、倫理學上前者を選むべしとなしてゐる。曰く、

『學問に對する熱情は、幸福といふ點より見て、富に對するそれよりも、望ましい』<sup>7)</sup>

『……………人間の幸福は、此等のもの(貨物と享樂物を指す——譯者註)より成立して居るといふよりも、寧ろ其等を所有する場  
合の平和と安固とより成立する。』

又物質的幸福には常に限界の存することに就て、次の如く言つて居る。

『……………汝の發達なる快樂(富と所有物との享樂より受くる所の——譯者註)の眞確中に於てすら、汝は不幸であるといふこと

- 6) Hume, An Enquiry concerning the Principles of Morals, (1751), sec. II. Of Benevolence, part. II.
- 7) Ibid. sec. V. Why utility pleases, part II. 其他 sec. IX. Conclusion, part I. にも同様の句がある。
- 8) Hume, Essays, ed. by T. H. Green and T. H. Grose, (1875), Vol. I, part. I, XVIII. The Sceptic, p. 221.

及び餘り耽溺しすぎるゝ、汝は光輝ある運命が汝になほ所有を許す所の享樂なきへ受けることが出來なくなる。』<sup>9)</sup>

斯くの如く、ヒュームは、幸福に對する精神的要素に重きを置いてゐるのであるが、併し彼はボナアの言つてゐる如く、『富は或る一人を必ずしも幸福には爲さない、しかしそれかと言つて、富なくしては通常人々は幸福たり得ない。外界財が或る程度に準備されてゐなければ、普通人は内界財(非物質的財)の意——譯者註)を全然實現し能はない』<sup>10)</sup>といふ假定を承認し、富、外界財に對しても或る程度の重要さを置いて居るのである。例へば、彼は或る個處に於て次の如く言つて居る。

『斯くて一人の富者が彼れの所有物より享くる所の快樂は、傍觀者に投げかけられて、そこに快樂と尊敬とを惹起し、而して此等の感情は再び認知され同感さるゝことによつて、所有者の快樂を増加し、そうしてもう一度反射されて、傍觀者の快樂と尊敬との新しい基礎となる。』<sup>11)</sup>

是に由つて觀れば、ヒュームが、物質的快樂が精神的快樂の基となることあるを認めたることは、明かであらう。是に於て、外界物たる富の生産及び分配に就て、彼が如何なる見解を持してゐたかといふことが問題になつて來るのであるが、之を要するに、ヒュームは、ベンタムの如く完全なる意味に於ける功利主義倫理觀を懷いてゐたのではなく、従つて幸福の意義、幸福の質及び量、最大多數の最大幸福といふが如き點に就て、説明の不十分なるを免れないのみならず、多分に功利主義ならざる要素をもつて居るけれども、然し、功利を倫理學の中心問題となし、功利による幸福を其の終局目的となしたる點に於て、彼を功利主義倫理の濫觴と看做すことは、失當ではなから

- 9) Ibid., XVI. The Stoic, p. 207.  
10) Bonar, Philosophy and Political Economy, p. 113.  
11) Hume, Treatise, Book II. Of the Passions, part. II. sec. V.

うと思ふ。

第二、ヒュームの經濟政策 人間の幸福にとつて富が或る程度の重要さを有つて居ることは、既にヒュームの認めたる所であるが、彼は、富による幸福の享受に就て最も緊要なるは、富の獲得及び保有に於ける安全 (safety) 又は安固 (security) であると考へた。而して彼によれば、この安全又は安固を支持するものが、即ち正義 (justice) の觀念である。今日正義と云はゞ、其の内容は極めて複雑であつて、到底一言にして其の意を盡すことは出来ないけれども、併しヒュームによれば、それは極めて簡單である。彼は、人々の欲望の程度が低く且つ其の範圍が狭かりし割合に富の存在量が豊富なりし原始共產の時代に於ては、又今日に在ても各家庭内に於ては、又全人類が一大家庭を形造るものと假定されてゐる所の、將來の理想社會に於ては、正義の觀念は全然無用であるとなし、<sup>12)</sup> 『唯だ各人が我儘であつて、寛容の心が制限されて居る場合に、自然が彼れの欲望を充たす爲めに貧弱なる用意をなすに過ぎないといふ事情が有つて、その時に始めて正義が發現するのである』<sup>13)</sup> と説明して居る。是に由つて觀れば、正義の觀念は決して自然的に人間の心に根ざして居るものでなくて、比較的少量の富を比較的多數なる利己的の人間が分け取らんとする場合に、社會の秩序と幸福とを保持する爲めに彼等が人工的に取結ぶ所の協定 (convention) である、ヒュームは解釋してゐたことが明かである。されば他面より之を觀れば、正義とは有限なる社會の富を社會の各人に分配し、以て各人の財産の私有を決し且つ之を理由づける爲めの社會的一方便である、といふことになる。而してこの正義なるものは、實に社會にとつて有用なるもの

12) D. Hume, Enquiries, (Selby-Bigge's edition) pp. 184-5; Treatise, bk. III, part II, sec. II.

13) Hume, Treatise, ibid.

であつて、若しこれなかりせば社會は常に不安であつて、人々の間に争の絶ゆる違がなく、爲めに社會の物質的幸福は多大の傷害を蒙るであらう。<sup>14)</sup> 曰く「公衆の功利といふことが正義の唯一の起源であり、この徳性の有利なる諸結果の考察が、其の功績の唯一の基礎である、云々。」

以上により、正義の觀念の意義及び起源に對するヒュームの考は明かであらうが、然らばそは如何なる内容を有するや、詳言すれば如何なる標準によつて富を社會各員に分配することを正義となすかといふに、彼は其の最も重大なるものとして今日所謂労働全收を主張した。<sup>15)</sup> 而して労働全收に就ては、次の如く述べて居る。

『或る人の技術又は勤勞によつて生産され若くは改良せられたる所のものが、斯かる有用なる慣習及び技能に對して獎勵を興へんが爲めに、永久に彼れの所有に歸せしめらるべきであるといふことを、解しない者があらうか。』<sup>16)</sup>

是に由て觀れば、ヒュームが、労働全收を内容とする所の正義の觀念によつて、富の獲得及び保有の安固を支持し、以て社會の物質的幸福を害せざらんことを主張したるは明かである。併し乍ら、以上は要するに富の獲得及び保有の安固より生ずる幸福の消極的方面に過ぎないのであつて、其の積極的方面即ち世に新たなる物質的幸福を造り出す——換言すれば富の生産——といふことに就ては未だ説明が加へられてゐない。されど富の生産と正義若くは安固との關係に就て觀んとせば、吾々は富の平等なる分配と社會の幸福との關係をヒュームが如何に解したるかを檢すれば足る。蓋し、以下説述する所によつて明かになるであらう如く、富の平等なる分配は、富の

14) Cf. Hume, Inquiry, pp. 181. 186. 188.

15) ヒュームは、貨物の所有權が正義の觀念に從つて發生又は移轉する場合として、現在占有若くは直接占有、先占、時效、添付若くは果實、繼承等を擧げて、本文には直接の關係なきを以て之を省く、

16) Hume, Inquiry, p. 195.

生産に關して、正義又は安固の最も強い敵だからである。

ヒュームは、富の平等なる分配と社會の幸福とに就て、次の如く述べてゐる。

『財産の平等なる分配を主張する所の、平等主義者は恐らく、宗教的種族より發生したる所の、一種の政治的熱狂者であつて、彼等の抱負が、それ自身實行し得べきものであり又人間社會に有用なものであるらしく見ゆると、……公然に誓ふ所の人々である。』

「勿論、自然は人類に對して極めて寛大であるから、若しもその總ての賜物が人間の間平等に分割され、而して技術と勤勞とによつてそれが増加するならば、各個人は總ての必需品及び大抵の人生慰樂品をも享受し得るであらう……といふことは認めなくてはならない。又、吾々がこの平等より離るゝ時に、吾々は富者に加ふるよりも、多くの満足を貧者より奪ふものであるといふこと、及び或る一個人の瑣細なる虚榮心の僅かなる満足が屢々多くの家庭、尙ほ大にしては多くの州民のパンを犠牲にするといふことは、認められなくてはならない。尙ほ平等の規則は、それが極めて有用であるだけ、全く實行が不可能であるやうには見えない、否現に數個の共和國に於ては、少くとも不完全な程度に於てではあるが、實行されたのである。……」

斯くの如くヒュームは平等の原則を或る程度に於て理解し、而してそれが社會的功利をより良く實現し得べきことを認めてゐるのである。

併し乍ら彼は、この原則が完全に實行し得らるゝものに非ざること、及び假ひ實行さるゝも、それは社會の生産力即ち社會の富その物を減少することとなるを考へ、矢張り結局に於てこれに反對の意を表せざるを得なくなつた。曰く、

『併し乍ら、歴史家は勿論(吾々の)常識すらも、如何に此等の完全なる平等といふ觀念が尤もらしく見えても、それは結局に於

て實行が不可能であること、及び假ひ然らずとするも、(却つて)人間社會に極めて有害であるといふことを、吾々に傳へてあらう。所有を平等にせんとするも、各人の異なる程度の技術、注意、及び勤勞は、直ちにその平等を破るであらう。而して若し平等を強ひて行ふことによつて(此等の徳性(技術、注意、勤勞等を指す——譯者註)を發揮せしめないならば、社會は最も貧窮に陥るべく、而して少数人の缺乏と貧困とを防ぐ代りに、全社會にそれを齎らざるを得なくなるであらう。)<sup>18)</sup>』

要之、ヒュームの考ふる所によれば、富の平等なる分配は、不平等に比して理論上より多くの幸福を生むことは疑なけれども、而かもこの平等は勞働全收を前提とする所の正義の觀念に反し、而して富の獲得及び保有に於ける安固を動搖せしむるが故に、延いては世の生産力を減退せしめ世の物質的幸福の源泉たる富その物の存在量を減少せしめるといふ不利なる結果を生ずることになるといふのである。斯くて安固又は正義は、積極的に世の生産力を増す上に於て、缺くべからざるものなることが明白になる。

吾々は、ヒュームの理論を以上の如く述べることによつて、茲に始めて、彼れの經濟政策の根本方針に到達することが出来る。即ち彼れの經濟政策の中心問題は、富の分配に於ける正義の維持といふことであつて、従つて平等の排斥である。彼は、『政府の起源』と題する論文に於て、次の如く言つて居る。

『人は家庭の内に生れ、必然の勢により、自然的傾向により、又慣習によつて、社會を支持すべく餘儀なくせらるゝ。この同的(共同)創造物(人を指す、譯者註)は、その進歩につれて、正義を施行する爲めに政治的社會を設立することに携はる、この正義なく

18) Hume, Enquiries, pp. 193-4.

ば人々の間に平和もなく、安全もなく、又相互間の交通もない。」<sup>19)</sup>

却説、茲に所謂正義は、前にも屢々述べし如く、富の分配を規律し、私有財産制度を説明し又は辯護する所のものである。けれども、こは、(ヒュームの説く所の如く) 利己的なる人間をして其の生産的業務に懸命努力せしめ、以て社會の生産力を保持し且つ増加せしむる爲めに、絶対に必要なるものであるといふ意味に於て、其の重要さを有つてゐる譯なのであるから、この正義は、實は富の生産を最大ならしむる爲めの人爲的手段たるに外ならないことになる。されば富の生産が主であつて、其の分配は生産の條件たるに過ぎない。生産を最大にすることによつて、世の物質的幸福を最大ならしむることを主義とする生産政策學者の一人にヒュームを加へたる理由は、爰に存するのである。

19) Hume, Essays, vol. I. p. 113.